

「100年時代を迎えた人生戦略」 第13回 川上 浩司 先生

COVID-19を経て、オンライン診療が一部認められるなど、医療のデジタル化も加速傾向になってきた。今回の対談では、学会理事の中神啓徳先生（大阪大学大学院医学系研究科健康発達医学寄附講座教授）がデータサイエンスの専門家である川上浩司先生（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻教授）にお話を伺った。



日本の医療現場のデジタルヘルスを牽引する 川上先生は医療の未来をどう捉えているのか！

COVID-19でどう変わる？ 社会と医療業界

中神 川上先生、今日はお忙しいところありがとうございます。今年は、COVID-19の影響があらゆるところで起きた1年でした。COVID-19によって大きく変わったこと、あまり変わってないことなど、川上先生が考えられていることを伺わせてください。

川上 今は、いわゆる“ニューモデル”になっています。すべてが遠隔、在宅方針となり、遠隔でできることを再認識できましたから、ITの力が社会を変えるきっかけになりました。産業として考えると、会議や講義が遠隔でOKとなると、打撃を受けるのが、当然、新幹線とか、航空産業などになるでしょ

う。いわゆるフィジカルな移動がなくなることにより起きる経済の打撃とか、あるいは雇用の減少が起きるだろうと考えています。

中神 では、先生のご専門の立場から、薬剤疫学やビッグデータの活用など、何か方向性とか、こういうものが伸びるのではないかと、先生が今後取り組みたいと考えられていることはありますか？

川上 僕はこの2、3年前からずっと、大学の医学部の授業でも学生たちに必ず言うことですが、これから医者はいらなくなるのではないかと考えています。冗談ではなく。

中神 なるほど。どんなお話なのか聞かせてください。

川上 今、人口が1億2,000万人いますが、あと30年もすれば8,000万人台前半になるわけです。人口